

ハバクク書は主よ、わたしが助けを求めて叫んでいるのに／いつまで、あなたは聞いてくださらないのか。わたしが、あなたに「不法」と訴えているのに／あなたは助けてくださらない。(1:2)と神への苦情、不満から始まっています。また、しばらくして、あなたの目は悪を見るにはあまりに清い。人の労苦に目を留めながら／捨てて置かれることはない。それなのになぜ、欺く者に目を留めながら／黙っておられるのですか／神に逆らう者が、自分より正しい者を／呑み込んでいるのに。(1:13)と嘆きます。神は、邪悪に苦しむ私を捨て置くはずがないのに、沈黙しておられると嘆くハバククの告白は、不正がはびこり、無力を感じ、不安になる現代の私たちの思いと同じです。



ハバクク ドナテッロ作

ハバククは神の御旨を知るために、諸国を見渡し、目を留めて見ました。バビロニアの台頭です。冷酷で剽悍な国民、自分のものでない領土を占領、暴虐な裁きと支配。それは信じたくない現実です。それを見て、ハバククはしかし、彼らは罪に定められる。自分の力を神としたからだ(1:11)と彼らの罪を糾弾します。この苦境に、人間は投網で十把一絡げに利用される海の魚のようだ、と嘆きは尽きません。

ハバククは砦の上に歩哨となって見続けます。その時また、幻を与えられました。幻を書き記せ。走りながらでも読めるように／板の上にはっきりと記せ。定められた時のために／もうひとつの幻があるからだ。それは終わりの時に向かって急ぐ。人を欺くことはない。たとえ、遅くなっても、待っておれ。それは必ず来る、遅れることはない。見よ、高慢な者を。彼の心は正しくありえない。しかし、神に従う人は信仰によって生きる。それは「裁きの時が必ず来るから、神に従って生きよと板に書き記せ」という預言者の使命

そのものでした。略奪、不法、恥辱、偶像礼拝がまかり通る世だからこそ、ハバククは対極におられる神を思い、しかし、主はその聖なる神殿におられる。全地よ、御前に沈黙せよ(2:20)と叫ばずにいられません。ハバククは預言者として記し、祈り、賛美を神に捧げます。現実には腐敗はわたしの骨に及び／わたしの立っているところは揺れ動いた。わたしは静かに待つ／我々に攻めかかる民に／苦しみの日が臨むのを。いちじくの木に花は咲かず／ぶどうの枝は実をつけず／オリーブは収穫の期待を裏切り／田畑は食物を生ぜず／羊はおりから断たれ／牛舎には牛がいなくなる(3:16)と苦しみをみつめながらもしかし、わたしは主によって喜び／わが救いの神のゆえに踊る。(3:18)と、神が待てと言われる終わりの日まで、信仰に生きることこそ、真の喜びだと告白します。



ハバククの画像を検索してみると、「耳」を指している青年ハバククのアイコンが沢山目に留まりました。旧約聖書続編「ダニエル補遺ベルと竜」33節にイスラエルにいるハバククが、バビロンでライオンの洞窟に投げ込まれたダニエルに、パンとシチュウを届けよとの神の声が聞こえました。瞬時に頭のとっぺんを捉えられ、髪の毛をつかまれ、息の一吹きで行って、与え、帰ったと記されています。「神の声が聞こえない、神は応えてくださらない」と嘆いたハバククですが、神の実力行使により、思わず、神の業に参与させられたということでしょう。また、辛い現実の中から幻として示された、変わらない神の約束の預言を記し、私達、嘆き続けるものに、希望をもって、忍耐して待つことをも、ハバククは教えています。